

## ”自然を学べ”：ウッズホール臨海生物学研究所の奇跡

福井義夫(ふくいよしお)

ノースウエスタン大学教授、医学部細胞分子生物学部門所属、同総合大学院教官。

元ウッズホール臨海生物学研究所教官。1972年理学博士。

明け方、ここはマサチューセッツ州ウッズホールにある臨海生物学研究所(MBL)の裏手にあるセントジョセフ教会の小庭である。眼前にはシーダー葺きの施設に囲まれた”ウナギ池”が朝陽を浴びて輝き、採集船が数隻停泊している。今朝は風でウミネコも静かだ。遠景にはマーサズビンヤード島が朝もやにけぶっている。ボストンから南へ1時間半、景勝の地ケイプコッドのつけ根にある当地で夏を過ごすようになって15年になるか。タイタニック号の探査、発見に成功したウッズホール海洋研究所(WHOI)もここにある。

生物研究者にとってウッズホールの持つ意味は大きい。夏の3ヶ月、世界中から数千人の学者、学生、そしてその家族がここに集まってくる。セミナー、講習会、執筆、家族は磯でロブスターのニューイングランド風

磯料理を実習し(?)、夜は発光クラゲを網ですくう。前世紀、MBL創立の基礎となった”夏期自然史学校”は、滞在研究者の子供達を対象とした”サイエンススクール”として現在でも夏のウッズホールに彩りをそえている。

私自身は、MBLの殊勲研究員井上信也博士と細胞運動に関する共同研究をする榮譽に恵まれている。”光学顕微鏡の神様”と称される先生から学ぶことは無限である。こう言うと表題”自然を学ぶ”と矛盾するように聞こえるかも知れないがそうではない。先生の技術補佐員ダイアンの言葉を借りれば、”先生も自然の一部”なのである。私の知る井上先生は生物学、物理学に造詣が深いのみでなく、比類稀なナチュラルリストである。今日は土曜日、夜は街外れにあるセントマサイア教会で恒例の”カンタータコンサート”が催される。苔むす教会の裏庭は、ロエブ、ウイットマンなどMBL創設者達が眠る墓地である。このような環境でバッハの教会音楽に浸るひときは、身も心も昇華してゆく。ここでは、神も、音楽も、人も、自然の一部なのである。

以前、夏期講習会”生理学：細胞分子生物学”コースの教官をしていた頃の話だ。講習会の主任はシカゴでの同僚かつ友人、ロバートゴールドマン教授。彼は当

時から新聞、雑誌のサイエンスライターをコースに招き、メディアを通じて生物研究の社会的価値の啓蒙に力をいれてきた。朝8時のセミナーに始まり、午前中は小グループに分かれての実験指導、午後からはラボでベンチワーク。8週間に及ぶスケジュールは厳しく、深夜までラボに残る学生も少なくなかった。そんなある晩、遺伝子構造の解明者ジェイムズワトソン博士がふらりと顔を出された。“2重らせん”には書かれていないが、博士も昔MBLの生理学コースを受講されたことがあると伺っている。今夜は、この近くにあるナショナルアカデミーの別荘での夕食会の後ちょっと様子を見に顔を出されたそうだ。夜半まで実験していた学生達にとっても励みになったであろう。あの当時博士の音頭とりで始まった“人間遺伝子解読”プロジェクトは予定より2年早く先頃完了した。刺身に目のない博士はなお意気軒昂である。

MBLは“Study nature, not books”をモットウに1888年に創設された。当時2万5000ドルの基金であったと言う。初代研究所長ウィットマン博士の“MBL精神”は、“生物学全領域の研究”と、“研究と教育の一体化”の2点であった。この理念は現在ますます重みを増し、MBLが世界に比類のない生物学研究所としての立場を

保ってこれを要因とされている。ウニ卵の受精、アメーバ運動、ヤリイカの神経伝達、クラゲの発光等の基礎研究で名高いが、ビタミンCの発見者アルバートセント-ジヨルジ教授が戦後に筋肉収縮の研究をしたのもMBLである。最近、環境科学生態系研究施設が新設され、未来的研究の力強い活動が始まりつつある。

日本とMBLの関係は深い。1975年裕仁天皇のMBL視察は歴史的事実だが、創成期には、当時シカゴ大学教授で帰国後日本の天然記念物保存事業に尽くされた渡瀬庄三郎博士も夏期講習会の教官をされたことがある。万事現実的な世の中で、MBLのような基礎研究施設が一世紀以上もの間世界有数の地位を確保し続けてこられたのは”奇跡”である。奇跡をもたらす要因は、美しい自然、人間の叡知、そしてそれを可能にする経済援助であろう。財政的にはこれまでロックフェラー財団、カーネギー協会等の財団の援助に大半を託してきたが、史上初の一般資金公募”Discovery: The Campaign for Science at the Marine Biological Laboratory”により2千500万ドルを目標とした資金活動が現在大詰めだ。

(注) これは、日経サイエンス2000年10月号の巻頭エッセイ”世界の研究室から”に出版されたもの

のオリジナル原稿で、実際の記事と細部が異なります

。